



本当の青春とは

サミュエル・ウルマンという詩人がいました。ほぼ無名の詩人でしたが、彼の書いた「青春 (Youth)」という一篇は、今ではすっかり有名になりました。

殊にマッカーサーがマニラでも、昭和天皇と会見した東京でもこの詩を自分の執務室にかけ、時に演説の中で引用したり、確かロバート・ケネディーの葬儀でもこの詩が朗読されたと記憶します。日本でも「電力王」といわれた松永安左エ門や「経営の神様」といわれた松下幸之助と、内外の政治家や経済人たちに愛誦あいしやうされてきました。

確かに、年を取ってきた私などにもどこか勇気を与えてくれる、そんな気分にもさせてくれる力強い言葉であることには違いありません。紙幅の制約から、さわりだけ紹介してみましようか。

青春とは人生の一時期をいうのではなく それは心の在り様をいうのだ

強い意志 創造の気性 生氣ある感性 臆病を凌駕する勇氣 妥協を退ける冒険心
人はただ年を重ねることで老いるのではない 自分の理想を棄て去ることによってのみ
老いる

歲月は肌のしわを増すが 情熱を失う時 精神は萎なえる

でも、少し引いて思い返してみますと、ここに詠うたわれている青春は、本当の青春なのだろうか、社会のリーダー的存在にとっては、むしろ老いの不安を打ち払い、己おのが意欲をかきたててくれる内容であることは分かりますが、しかしそれは、まぎれもなく安定の中で語られる青春のように思われます。

三島由紀夫が「青春を語る」というインタビューの中でこういうことをいっていました。「青春というのは、やっぱり年齢的なものと実際には関係が・・・」という問いかけに答えて、「ありますね。そりゃあ、つまり無知ということが一番大きな要素で、これが一番核心ですよ。それが青春の特権じゃないですか。41まで無知でいるということはなかなか難しく、武者小路實篤みたくによほど天才じゃなきゃ出来※※ない」。無知を青春の特権などと、如何にも才気煥発の三島さんらしい答えです。

人それぞれ青春に対する見方は、異なるのですが、私は、青春から不安定さをぬぐい去ることは出来ないように思う。ですから、はっきりいえば、安定の中で語られる青春は、本当の青春とはいえないのではないかと。

昔、駆け出しの専任講師の時代、本学でいえば「建学の精神実践講座」のような時間で、会場に行ってみると、予定していた講演者が急に来られなくなったという連絡が入

って、たまたま司会役であった私は、何人かの先生方とどうしようかということになって、その中の長老格の、当時個人的にも親しくしていたフランス文学の女性の先生に、「先生なら、学生たちに何かお話し出来ると思うので、話題は何でもいいので、話してやってくださいませか」と。そういえば、その方も詩人でした。当時60近くでいらしたのではないかと思います。「じゃあ、福井さんがやれというなら、私がやるわ」と快く登壇して下さったわけです。人間、予期しないことにぶつかった時、どのように振る舞えるのか、それは、その人のもつ本当の力なのかも知れませんね。

全体の話は、忘れてしまいましたが、私が今でも時々思い起こすのは、次のくぐりでした。「今、こうやって皆さんの前でお話をし、若い皆さんの輝かしい姿を見てみると、とってもうらやましくなります。私にも皆さんと同じような時代があったのだと思います。でも、今の私に『もう一度あの時代をやりなおしてみろ』といわれたら、とてもしんどくて出来ない」。きっと、その先生が今の立場を創り上げるまでには、人知れず大変な努力と苦労があったのだと想像します。

今、私も、かつての先輩教授よりも更に年端^{としは}を重ねて、あの先生の言葉が痛いほどよく分かります。

今年も大勢の学生諸君を迎えました。4月来授業も始まっていて春 Semester も佳境に入り、きっとみな意欲に燃えて学生生活を送っていることと思いますし、そう期待しています。

でも、昔から「五月病」という言葉もある。意欲満々入学してきた新入生が大学の授業が思いのほか高校の授業の焼き直しに思えたり、はたまたゴールデンウィーク疲れも手伝ってか、何となく勉強への気持ちが乗らない、大学とはこんなものかといった、ややブルーな気分になることを指す言葉です。俳句の季語にも「春愁^{しゅんしゅう}」という言葉があるそう。

三島由紀夫がいうように青春の本質が「無知」にあるにせよ、私のように青春の本質が「不安定さ」にあると見るにせよ、善き先輩教授のように「あの青春をもう一度繰り返すことはしんどいこと」というにせよ、だからこそ青春には失敗も挫折もつきもので、でもそれを乗り越えなかった大人は、きっと一人としていないのですよ。

※ “Youth” にはオリジナル版とライト版があるが、上記引用は “The Reader's Digest” から。

※※ 『三島由紀夫全集』(第41巻) 新潮社。

[>前のページへ戻る](#)